校長室だより～燦燦～ №８９７

山場

2023.11.12

８９５号の続きである。彼は、１０月の『海のいのち』の授業に向けて、また私のところにやってきた。８月２３日のことだった。きっと、指導案のことが頭から離れない夏休みになったことだろう。指導案の一次案のようなものができてきた。すなわち、彼の授業構想が具体化されてきたということである。

前回と同様に、いろいろな話をした。話をしていくうちに、彼の構想が固まればよいと考えた。こちらからは、ある要望を出した。それは、リーディングスキルによる読解力向上では、毎時間やった方がよいと言われているものである。それらは、どこの学校でも、誰にでもできることとされている。そうであるならば、彼にもできるはずである。

共書き、音読、視写、親密度の低い言葉の確認である。彼の場合は、視写以外はすでに行っている。視写がいいと言っても、なかなか先生方は授業に取り入れてくれない。そこで、多くの方が参観にくる研究公開の授業でやってほしいとオーダーを出したわけである。実際に見れば、そのよさなどがわかるだろう。

１０月に授業を行う上でポイントはいろいろあるが、一番は、本時のねらい、子どもにおろすめあてとまとめであろう。授業で扱うのは、定番教材『海のいのち』である。本時のめあてが、「なぜ、太一は、瀬の主をうたなかったのだろうか。」である。これも定番中の定番である。ただし、めあての文言というのは、その授業を大きく左右する。「瀬の主」とするか「クエ」とするかでも違う。「うたなかった」か「うてなかった」でも違う。大事なことは、授業者自身が、どのように読んでいるかである。それが、授業の深さにつながる。

９月１９日、彼はまたやってきた。３回目である。学習指導案も完成に近づいている。彼が授業を行う小学６年生の国語の指導案は、ほぼ出来上がった。彼は、研修主任でもある。当日の要項を作成する担当者である。特に、研究概要が重要である。彼は、それをまとめ、当日は、全体会の場で説明もする。授業だけでも十分大変なのに、加えて全体を総括する役目も担っている。

当日、参観に来てくれる先生方の立場になって、指導案の形式や研究概要に対しての要望を伝えた。全体に関わることなので、学校で検討し、可能であればということである。準備の都合もあるだろう。

そして、１０月１３日、彼は再び現れた。４度目である。立派に出来上がった当日の要項を届けてくれた。授業者である彼への期待や思い、研修主任としての彼への思いなどを伝えた。彼が、この２年間、大変だったことは想像に難くない。だが、彼の長い教員人生を考えると、この２年間はどうなのだろう。もしかしたら、教員人生の最初の“山場”だったのかもしれない。それは、後になってわかることである。働き方改革が声高に叫ばれる世の中だが、教員人生の山場は必要なのではなかろうか。彼は、この２年間で培ったものをもとに、これから力強く教員人生のステージを一つ一つクリアしていくはずである。私は、そう信じている。